



相談役 辻田満

第5回目となる連載コラムは第4話シリーズにわたって「スクエアダンス指導者の育成」について書きます。第1話では「増やそうスクエアダンスの指導者」についてです。

1. 増やそうスクエアダンス指導者

1946年長崎にて進駐軍民間教育担当官のW.P.ニプロ氏によって初めて日本にスクエアダンスが紹介されたことは多くの皆さんがすでにご存知のことと思います。これは日本におけるスクエアダンスの幕開けであると同時に日本におけるフォークダンスの幕開けでもありました。それから半世紀を経て日本におけるフォークダンス人口は250万人といわれる規模まで普及しました。それに対してスクエアダンス人口は約1万5千人です。何故ここまで普及人口に違いが出て来てしまったのでしょうか。もちろんダンスそのものが持っている特殊性や普及のプロセスの違いもありますが、その決定的違いが指導者の規模であると思っています。

フォークダンスは極めて多くのダンサー

が指導者となって普及活動が展開されて来ました。それに対してスクエアダンスはコーラーと言う特殊な存在があったために主としてコーラーが指導者として普及活動を展開してきた経緯があります。現状でもコーラーの数はダンサーの僅か5%程度です。そこにフォークダンスとスクエアダンスの愛好者数の規模の決定的な違いを生む要因となってしまいました。以下に、私なりの指導者育成の結論を先に述べます。

- ①. 指導者を特殊なステータスとしての取り扱いにしないこと。
- ②. 愛好者の多くがそれぞれの立場や役割の中で指導者としての意識でその役割を果たすこと。
- ③. 常に愛好者は指導者としての研鑽を機会ある毎に積むこと。
- ④. コールが出来なくても踊の指導が出来るサポーター（インストラクター）を指導者として育成すること。

以上の4点でスクエアダンス界には愛好者の可なりの割合のスクエアダンス指導者が誕生し、そして彼等が普及活動に努力さえすれば恐らく愛好者10万人もけして夢ではないと信じております。

(本連載は次号に続きます。)





相談役 辻田満

第5回目となる連載コラムは第4話シリーズにわたって「スクエアダンス指導者の育成」について書きます。第2話では「指導者が守るべき倫理」についてです。

2. 指導者が守るべき倫理

ここでご紹介する日本スクエアダンス協会の倫理要綱は私が協会の理事として在任中に手掛けたものです。これこそスクエアダンス指導者が率先して守らなければならない倫理です。いくら踊りの指導技術に長けていてもこの倫理を率先できなければ指導者としては不適合です。

スクエアダンスは、誰もが参加でき、楽しみながら健康の維持・向上を図ることができる生涯スポーツ・レクリエーションです。これを普及・振興し、発展させるため、愛好者ひとり一人が立派な社会人として行動することを自覚し、スクエアダンスを楽しめる環境を創造していくことの大切さを認識することが必要です。ここに、私たち日本スクエアダンス協会（以下「協会」という。）会員は、

協会の定款に従い、生涯スポーツ・レクリエーションとしてのスクエアダンスが広く普及することを願い、日本スクエアダンス協会倫理要綱を定めます。

- ①私たちは、スクエアダンスはみんなで楽しむものであることを念頭において、人種、宗教、性、年齢に拘らず、あらゆる人々を公平に扱います。
- ②私たちは、行動に当たって、常に社会規範を遵守し、思いやりと礼儀を基本としたマナーをしっかりと守ります。
- ③私たちは、スクエアダンスを広めるため、他の人に楽しさを伝えることを想像して行動し、新しい仲間を活動における最も重要な人々として受け入れます。
- ④私たちは、個人の尊厳を互いに尊重しあい、自分自身も高潔な人間であるよう努めます。
- ⑤私たちは、活動を通じて、会員相互の親睦を深めると共に、地域の発展や国際理解・交流の推進に寄与します。
- ⑥私たちは、社会教育の観点から、コミュニティづくり、人々の健康、高齢者や障がい者等の生きがいの支援、学校教育活動などへの協力を惜しみません。
- ⑦私たちは、社会の環境の変化や国際的な動

向に照らして柔軟に対応し、スクエアダンスの普及に努めます。

⑧私たちは、ボランティアの精神を尊重し、活動を行うことにより、物質的な利益を得ようとの気持ちをもちません。

⑨私たちは、スクエアダンスのもつ協力と協調の精神を尊び、健全で品位あるクラブ組織の発展と維持に協力し、そのための義務を果たします。

⑩「私たちは、協会もしくは他の会員の信用を傷つけ、また、協会もしくは他の会員の不名誉となるような行為はしません。

(本連載は次号に続きます。)



### 相談役 辻田満

第5回目となる連載コラムは第4話シリーズにわたって「スクエアダンス指導者の育成」について書きます。第3話では「サークルと指導者の役割」についてです。

#### 3. サークルと指導者の役割

##### (1). 民主団体の三つの目的とは何か

- ①. そのサークルの主題を学ぶ
- ②. サークルの民主的運営の技術を学ぶ
- ③. 奉仕活動と友好団体との協調の必要性を学ぶ

特に③の活動にていては、スクエアダンスが公共性をもっているところから、また社会教育や生涯学習の立場からも必要です。ややもすれば、集团的利己主義におちいりがちであり、特に注意しなければならないことです。

##### (2). 指導者の心得

指導者の心得を以下に紹介します。

###### ①. 指導者ぶるな

- ②. 人格を発揮せよ
- ③. 裏方仕事も進んでやれ
- ④. マナーをしっかりと身につけさせよ
- ⑤. レクリエーション一般に強くなろう
- ⑥. 初心にかえろう
- ⑦. 楽しく踊らせる工夫をしよう
- ⑧. 浮き上がらないようにせよ
- ⑨. 仲間の悪口をいうな
- ⑩. まかせておけ

##### (3). 指導者の資格

「リーダーのパーソナリティーを十分に発揮せよ」といわれていますが、人格とか人柄とは何でしょうか。ここでニューマイヤーの分析を中心に考えてみましょう。

###### ①. 身体的なもの

- A. 外観もよく健康である人
- B. 精力と熱意にあふれた人

###### ②. 知能的なもの

- A. 明確な思考力、判断力をもっている人
- B. 計画力、組織力、表現力、実行力がある人
- C. 民主的運営ができる人

###### ③. 性格と人生観

- A. 真から人間が好きな人

- B. 明るく勇気がある人
- C. ユーモアが解せる人
- D. 感情が円熟している人
- E. 責任感があり信頼できる人
- F. 気分のむらなく信頼できる人
- G. 健全な人生観をもち、人生に喜びのある行き方をしている人
- H. 人間成長の可能性に信念をもつ人

④. 他人との関係

- A. 人間の価値と尊厳を認める人

- B. 洞察力、理解力と共に人への思いやりがある人
- D. 奉仕の精神をもつ人

最後に、指導者は精神的に安定していなくてはなりません。そうでなければ人を自由な気持ちにさせないし、柔軟性のある指導者にはなれません。

参考文献：「指導の手引」、日本FD連盟  
(本連載は次号に続きます。)

- C. よく人と交わり協調的に働く人



## 相談役 辻田満

第5回目となる連載コラムは第4話シリーズにわたって「スクエアダンスの指導者の育成」について書いてきました。第4話では最終話として「指導者育成に関する私見」についてです。今回で本シリーズ「スクエアダンスの指導者の育成」はおわりです。

### 4. 指導者育成に関する私見

私達スクエアダンス界を取り巻く環境は時代と共に変化しています。指導者としては常にその環境の変化に対応したクラブ運営を模索していかなければなりません。対応すべき課題は難しく唯一無二の正解などありません。指導者として最も大切なことは会員にその課題の重要性および意義をきっちりと説明できる力とその課題から常に逃げることなく大いに正しく議論できる力を持つことです。

指導者はけして目先のことで判断せず、いろいろな角度から全体を見て判断して行かなければなりません。常に会員にメッセージ

を出し続け、クラブ運営に係わる重要な課題に対して無とん着にさせることなく、むしろ会員意識を向上させて行くインパクトを与えることこそ指導者としての重要な役割なのです。

### (2) 新しい指導者像

一般に指導者とは組織に対して強力なリーダーシップを発揮できるタイプが望ましいとされて来ました。とくに現在のような混とんとした社会ではますますトップダウンによる統率が組織の命運を左右することとなります。

しかし、これはあくまでもビジネスや政治の社会の話であって、私達のレクリエーション社会にはそのままあてはまるものではないと思います。では、これからのレクリエーション社会に望まれる指導者像とはどんなものなのでしょうか。

それは、ますます多様化する会員ニーズを「楽しい例会活動」と言う大原則の下にきちんと編集して行けることができる人が最もこれからのレクリエーション社会に望まれるリーダーと言えるのではないのでしょうか。

指導者はけして自己の考えのみに固着しないで多様化した意見の合意形成のプロセスを重視できる編集者でなくてはなりません。

指導者は会員達の知恵でお互いの利害関係を調整出来る「組織としての自然治癒力」を高められるように働きかける事が必要です。それには、常に会員に対して必要な情報をアナウンスするとともに、先に結論ありきや説得ではなく、出来るだけ多くの会員を巻き込んだ議論をして行く必要があります。そして指導者は常に会員の自己責任の下に組織としての合意形成を築き上げられる編集者であれば良いのです。

スクエアダンス界はダンサーとコーラーだけでは成立するものではありません。

ダンサーとコーラーと指導者の三者がいて初めて成立するものです。この素晴らしいレクリエーションとしてのスクエアダンスをもっともっと普及させるためにはダンサーやコーラーの育成以上に指導者の育成に力を今後注いで行く必要があります。

愛好者の中から多くのスクエアダンス指導者が誕生し、そして彼等が普及活動に努力さえすれば恐らく愛好者10万人もけして夢ではないと信じております。

(本連載はこれで終わりです。)